

平成26年度第1回墨田区図書館運営協議会会議録

1 日時 平成26年9月20日(土曜日)

午前10時～午後0時

2 場所 ひきふね図書館 会議室

3 出席者

| | | |
|-------|--------|-----------------------|
| 会 長 | 永田 治樹 | (筑波大学名誉教授) |
| 副 会 長 | 河西 由美子 | (玉川大学准教授) |
| 委 員 | 西村 均 | (墨田区立竪川中学校長) |
| 委 員 | 金子 キク子 | (図書館ボランティア「くさぶえ」) |
| 委 員 | 小田垣 宏和 | (墨田区ひきふね図書館パートナーズ) |
| 委 員 | 北村 志麻 | (墨田区ひきふね図書館パートナーズ) |
| 委 員 | 戸島 敦子 | (公募区民委員) |
| 委 員 | 村山 厚子 | (公募区民委員) |
| 欠席委員 | 細木 隆 | (墨田区立第四吾孀小学校長) |
| | 持田 由美子 | (図書館ボランティア「ブックトークの会」) |

4 議事

(1) 墨田区図書館運営協議会会長及び副会長の選挙

(2) 平成25年度図書館事業の報告

(3) 墨田区子ども読書活動推進計画(第2次)の現時点での到達状況及び第3次計画の策定について

5 会議録

議事第1

墨田区図書館運営協議会会長及び副会長の選出

(墨田区図書館運営協議会要綱及び墨田区図書館運営協議会運営要領の規定に基づき、委員中の指名推選により、会長に永田治樹氏、副会長に河西由美子氏が選出される。)

議事第2

平成25年度図書館事業の報告

永田会長 事務局に説明をお願いしたい。

議事第2について南部主査が説明する。

説明概要

- ・平成25年度の登録者数、貸出者数、貸出点数、来館者数及び蔵書数
- ・ひきふね図書館と統合前のあずま・寺島両館の事業実績の比較

永田会長 利用統計の世代別登録者数について、23歳以上はまとめて掲載されているが、もう少し詳細な集計はできないか。

南部主査 年代別の数値を次回の会議までに準備しておく。

永田会長 年代ごとに住民数(母数)が異なり、その母数によって数値の意味合いも変わってくる。ぜひお願いしたい。見ると、50代の登録者が少ない。通常50代は30代よりちょっと多い。最近が高齢化で60代の利用者が増えているが、その辺の傾向も把握できるとよい。

南部主査 次回は報告をする。

永田会長 平成25年度はひきふね図書館開館の年なので、ある程度増えているのだろう。問題は2年目以降である。しかし、パートナーズ等のボランティア企画で盛り上げれば維持できると思う。

北村委員 それに関連して、このイベント開催回数というのは、ボランティア企画のイベントも含んでいるのか。

南部主査 内訳を報告する。児童のイベントが64回開催で参加者数が2,433人、文化講座が4回開催で参加者が217人。今ご質問があったボランティア企画のイベントが24回開催で参加者が369人である。

戸島委員 貸出者数にしても貸出点数にしても40代が多くなっているのがわかる。

北村委員 30代、40代が多いというのは、自分の子どもの分を自分のカードで借りてしまうからではないかと思う。利用状況を把握するなら、登録者や貸出者の年齢で統計を取るのではなく、どのような本が借りられているかを把握すべきだと思う。

戸島委員 借りられている本の傾向についてのデータはあるか。

南部主査 利用統計で種類に分けた統計を出している。一般図書、児童図書、視聴覚資料、雑誌、その他という分け方をしている。館によっても、ひきふねでは、一般図書が約36万点であるのに対して、児童書は約16万点となっている。総計で見ても、一般図書と児童書の割合としては、児童書の割合が一般図書の半分にやや欠けるといったところである。

小田垣委員 図書館によっても割合が違う。立花図書館では児童書は一般図書の半数を超えている。

倉松館長 現在ではやや薄れてきてはいるが、墨田区では図書館ごとに特色を持たせて運営している。立花図書館は児童書を充実させており、他の館と比べて児童書の

貸出も増えているのではないか。

西村委員 7歳～12歳の利用者数と児童書の貸出点数を考えると、子どもの本を親が借りているという現状もあるのかなと思う。実際に墨田区の全小中学校では調べる学習コンクールに参加している。学年によっても違うが、保護者の方も一緒に連れてきて、一緒に本を選んでやってくれていることの表れとも思う。なので、難しいとは思いますが、調べる学習用で借りられる件数が出せると、その活動の効果が目に見えてくると思う。私の学校でも総合学習の時間に課題解決学習をやっているが、私の学校ではネットは使わせない。ネットは不確かな情報もあるので、本で調べるように教えている。その効果もあり、図書室の利用も増えている。ネットを禁止にしてから増えているのが実情である。

南部主査 どこまで詳しく出るかはわからないが、読み物と調べ学習で主に使用する0門から8門の図書ということなら出るかと思う。

永田会長 北村委員の指摘は重要である。傾向としては、一番貸出が多いのは40代で、30代は忙しくて貸出数は伸びない。子どもと一緒に図書館に来るのは20代からである。その辺の利用の傾向を抑えるには先ほどの状況把握が必要である。

南部主査 図書館では0歳からカードを作ることができる。利用状況の把握については、現在自動貸出機の導入もあり、どの利用者のカードが使われているか把握するのが難しくなっている。できる資料は用意したい。

戸島委員 図書館によって特色を持たせているということだが、全館の特色を教えてください。

南部主査 特色ある図書館運営は昭和63年から始めている。その頃の、あずま図書館では外国書、緑図書館では郷土・歴史、寺島図書館では文学、立花図書館では児童・家庭、そして八広図書館では自然科学としている。平成25年度にあずま図書館と寺島図書館が統合してひきふね図書館が開館したので、ひきふね図書館は両図書館の特色を引き継いでいる。ただ、今は一部で返却館方式を導入しており、本が返却された図書館の蔵書となるシステムとなっている関係上、やや特色は薄れてきている。

戸島委員 コミュニティ会館図書室には特色はあるのか。

南部主査 コミュニティ会館は児童、集会室、図書室とあるが、図書室の特色というのではない。

戸島委員 私は横川コミュニティ会館図書室をよく利用するが、詩の本が充実しているという印象があった。

倉松館長 返却館方式では、返却本は返した図書館の蔵書となるので、詩の本を読む方が多く住む地域の図書館には詩の本が集まる傾向がある。返却館方式を通して、それぞれの地域のニーズにあった資料が集まるということもある。

永田会長 蔵書の重複率はどのくらいかわかるか。

真田主事 選定の際には、原則1タイトル1冊で発注している。ただ、予約が多数入っているような資料はチェックをして複数冊購入している。具体的な数値についてはとっていない。

永田会長 1タイトル1冊というのは、館単位か、それとも区立図書館全体でか。

真田主事 全体で1タイトル1冊である。今は全館の資料をひきふね図書館で集中選定を行っている。

永田会長 それならばそんなに高くはないと思う。

田中緑図書館長 考え方として、いろいろなタイトルを集めたいというのがまずある。人気本については複本を買うが、複本を買うのは文学くらいで、基本的には1冊である。

河西委員 ベストセラーの購入冊数の上限は設けているのか。

田中緑図書館長 各館2冊ずつと考えているが、それでも予約は数百件入るという状況を踏まえ、読み終わった方へ寄贈のお願いをしている。

小田垣委員 児童書の中に漫画は含まれているのか。

田中緑図書館長 漫画は基本的には一般書として置いている。児童系のコミックは児童のところに置いているが、今はコミックは買っていない。1点補足をする。貸出の利用状況について、団体貸出件数とあるが、これはほぼ学校、幼稚園の学級文庫と調べ学習用の資料の貸出である。

戸島委員 学校等に団体貸出をする場合は、学校にもよるが、学校から本を指定してくるのか、それとも図書館が選ぶのか。

南部主査 学校への団体貸出も増えている傾向があり、先生にはできるだけ選びに来てほしいとお願いしている。ただ、中には先生の都合によって、図書館で100冊選んでほしいと言ってくることもあり、リストを送ってきてこちらで引き抜くということもある。我々ももう少し効率的にやっていきたいという思いがあり、今後先生から要望があったときに予めセットを作っておいて貸し出すということも考えている。

戸島委員 私は江戸川区で勤めていたことがあるが、江戸川区は図書館に力を入れていて、学校の先生の団体貸出用の部屋があり、そこで先生が選ぶというシステムをとっている。

南部主査 先生も23区の間での異動があり、江戸川区から転入された先生は自ら引き抜きをされる先生もいる。

北村委員 今話が出たセット貸出だが、千葉県立図書館がテーマ別のセット貸出をしている。修学旅行前に修学旅行用のセットを貸し出すとか。そういうような取組が今後できるようならやってみても良いのではないかと思う。

河西委員 私がこの10年ほど実践研究で行っているものの中に、「調べ学習パッケージ」というのがあって、たとえば大豆なら大豆の調べ学習に使える本を20冊予

めセットして専用のワークシートと一緒に学校に送付できるパッケージを作成している。小学校でいうと1年生～6年生の各学年に1つずつパッケージがあれば全学年で調べ学習が実践できる。このようなセットがあれば、学校の先生方も1つテーマを設定して最寄の公共図書館に依頼すれば、関連の資料の提供が受けられ、準備のための先生方の労力も最小限で済む。市川市は授業で使う資料を市内の学校でうまく共有するために、市内すべての学校で年間の図書館利用計画を立てて、同一時期に希望図書が集中しないよう各学校が時期を少しずつずらすように工夫している。計画的にできてとても良いシステムである。

金子委員 調べ学習の傾向がわかるとそういう問題も解決してくると思う。今のところ傾向はつかめていないのか。

南部主査 昨年度から夏休みに教育委員会の指導室の先生方と一緒に個別相談会というのをやっている。昨年は270件ほど、今年も200件ほど相談に来ている。そこで先生を退職された方にご指導いただきながら図書館員はそのそばで本をテーマにそってご用意をさせていただく方式をとっており、どういった本がなかったかなどはわかってきているので、なかった本を今後買っていこうと計画をしている。

西村委員 本日欠席されている持田委員と同じ学校で仕事をしていたことがあるが、司書をやられていたのだが、学校に図書館端末がある。そこで私から持田さんに今度修学旅行があるからと関係の本をお願いすると、50冊くらい注文してくれる。図書館と学校の間をトラックが回っていて、各学校週2回程度本を配付したり回収したりということをやっていた。このように手軽に図書館の本を利用できるシステムというのがあると良いと思う。予算の問題もあると思うが、やっていただくと学校としては助かる。ちなみに、持田さんには2週間に5日来ていただいていた。比較的頻繁に来ていただけていたので頼みやすかったし、逆に持田さんの方から年間指導計画を見て必要な本を必要な時期に取り寄せるようにしてくれていた。

河西委員 学校の先生は、来週授業で使うとなると、来週には本が欲しい。準備に2週間かかると言われると困る。なので、司書が常駐していると学校現場は大変助かると思う。

北村委員 学校司書についてだが、自治体によって大分対応が違うようである。たとえば、この前豊中市の方にお会いしたが、全ての学校に専門の図書館司書がいる。墨田区はどうなっているのか。

倉松館長 教育委員会の指導室という学校の教育課程を指導する部署があり、そちらに担当職員がいるが、残念ながら学校図書館専門の方はいない。実態では、区立図書館の職員が週1回半日程度お伺いしている。あとはボランティアを育成しているので、ボランティアの方に行ってもらっている。小学校は割とカバーできていると考えているが、中学校はやや手薄になってしまっているというのが実態である。今

回学校図書館法も改正されたので、区としても今後考えていく必要がある。

北村委員 私の子どもが通っている学校でも、図書館の職員に学校に来てもらうようになってから学校図書館がかなり変わり、ありがたく思っている。前は書架がガラガラで本がなく、子どもたちも本を借りるような状況ではなかったが、今はだいぶ改善された。しかし、まだ改善の余地はあると思う。

永田会長 学校図書館法の改正による状況の改善もあるが、学校連携をさらに進めていく必要がある。今まで聞いていると、墨田区では学校連携は比較的うまくいっているという印象である。さらに今後どう発展させていくかという視点から工夫していただきたい。

議事第3

墨田区子ども読書活動推進計画（第2次）の現時点での到達状況及び第3次計画の策定について

永田会長 事務局に説明をお願いしたい。

議事第3について南部主査が説明する。

説明概要

- ・子ども読書活動推進計画（第2次）の概要に基づいた、計画目標（児童書・絵本の貸出数の増加、学校図書館連携システムの全校への導入及び当該システムによる1校あたりの図書貸出数の増加）の現時点での到達状況
- ・子ども読書活動推進計画（第3次）の策定方針（計画目標・課題など）

永田会長 この件については、河西委員が専門なので、まず概略をご説明いただいてから議論したい。

河西委員 それでは説明する。国をあげての子ども読書活動推進の一番大きなきっかけは2000年の子ども読書年である。国会の決議で決まった。その背景には、60年以上継続している読書調査で、1997年頃に高校生の不読率（過去1カ月で自発的に読んだ本が0冊）が70%に昇るという数値が出たことがある。これは驚異的な数値である。このまま子どもたちが本を読まなくなったらどうなるのだろうという危機感が高まり、2000年が記念の年になった。その翌年、子ども読書推進法ができ、その法律の施行のために、都道府県・市町村レベルでの子ども読書活動推進計画が出来た。その時期から実施された事業の成功例の一つがブックスタート事業である。しかし、現時点で実施している自治体は全体の半分くらいである。現在は、国・県・市レベルで時期的なずれはあるが、おおよそ子ども読書推進計画の2次が終わり、国は昨春に第3次計画を策定した。第1次から現在までに並行して起こった教育界の問題に、学力の低下が挙げられる。2003年のPISA型学

力調査ではOECDの加盟国の平均以下になってしまった。そのため2003年以降、文部科学省は、読解力向上プログラムを策定し、成績向上に力を入れている。同時に読書の推進が学力と結び付いて考えられるようになった。今後第3次の計画では、第1次、第2次を踏まえて、読書を学力向上に結び付ける具体的な方策が各地域の重要課題となることが推測される。

永田会長 この計画は社会的な支持があり、進んできたと思う。OECDの学力到達度調査(PISA)の結果も少し良くなってきている。このような動きのなかで特筆すべきは、読書というのは、生活の営みにとって大変重要だということが認識されるようになったことである。読書は学力の面だけではなく、子どもたちの生活に大きく影響を及ぼしている。その辺りが、子ども読書計画を推進するなかで生じた社会的な大きな認識の変化であった。ただ、十分かと言われると十分とは言えない。さらに第3次の計画を策定するということになる。

北村委員 まず目標を定めるのが一番大事なのではないかと思う。

永田会長 家庭、学校も含めて包括的な視点で計画を立てていくことになると思うが、社会的に読書を推進する上で活躍してもらいたいのが図書館である。いろいろな調査でも出ているが、親の所得が高ければ子どもは読書をよくする、つまり、所得の低い家庭の子どもはあまり読書をする機会がない。そして、そういう差ができるとやがては社会的な凝集性が崩れてくる。そういう状況があるわけで、そのような環境にある子どもをサポートする必要がある。そういった点では、学校よりも図書館の方がやりやすい。

小田垣委員 そういったセーフティネットの役割を図書館が果たすというのが重要になってくる。

河西委員 アメリカとかだとそういう話が先に来るが、日本はそういうことが語られない。以前民主党のゴア副大統領の時代に「インターネットスーパーハイウェイ」という「高速道路のように全米にインターネットを張りめぐらせよう」という政策があったが、家庭にコンピュータの無い子どもたちについて、政府のマニュアルには「図書館に行きなさい」と書かれていた。しかし、日本の公共図書館で子ども向けにコンピュータが解放されているところは限られており、デジタルデバイドの砦に図書館がなり得ない状況がある。本だけではなく、デジタルも含めてどのように子どもを支援するかが大事である。

永田会長 それは高齢者も同じである。

北村委員 しかし、これは図書館だけではなくいろいろな課にまたがっているので、協力を得るという上では、ある意味チャンスともいえる。

永田会長 学校は学校の立場からのことしかできない。家庭では難しいところもある。なので、図書館にはそういう要素を積極的に支援してもらいたい。実際はお話の会とかボランティアを養成するというようなことしかできないが、そのような意識

はもったほうが良い。

西村委員 先ほど永田会長から所得と読書の関係の話がでたが、OECDのPISA型学力調査でクロス調査というのがあり、年収と学力は比例している、しかし、一番相関があるのは、家にある蔵書数だという調査結果がある。学力向上との関係もしっかり証明されているということを計画に入れ込むことも重要ではないかと思う。もう1つ、この計画には幼稚園、保育園、学校としているが、一番時間があるのは学童クラブである。これが入っていないといけないと思う。学童クラブに予算をつけて本を用意する。子どもたちは必然的に毎日学童クラブに行っている。そこに本が必要だということである。今、墨田区では幼保小中の連携をやっている。私の学校のブロックには2つの小学校があるが、その1, 2, 3年生が学童クラブに行かずに、自分が出た保育園に行って小さい子に読み聞かせをしているという話を聞いた。その幼保小中の連携に係る予算が15万円ほどついているが、そのうちの5万円ほどを使って幼保小中に絵本を配分している。中学校では職業体験のときに保育園にも行くので、そのときに自分たちで本を持って行って読み聞かせをしている。大人だけではなく、小中学生もできる話だと思っている。その辺も計画に盛り込めたら良いと思う。

永田会長 今話が出た、学童クラブと図書館の関係では何かあるか。

南部主査 今のところ学童クラブにというのはない。団体貸出をしているところはあるが、学校にはブックトークとか読み聞かせをやっているが、放課後の学童クラブにというのはないと思う。

永田会長 別の自治体では、同じ建物で図書館の横が学童クラブになっているところがある。そういうところは交流できている。

田中緑図書館長 児童館から要望はたまにあるが、学童クラブからは今までない。ただ、コミュニティ会館図書室においては、コミュニティ会館内の学童クラブと連携はしていると思う。

永田会長 学童クラブはどこかの所管か。

倉松館長 子ども課の所管である。

永田会長 縦割り行政になってしまって、連携が取れていないかもしれない。

北村委員 私も学童クラブを使っているが、学童クラブは孤立してしまっていて、小学校とすら連携が取れていないのが現状である。図書館から巻き込むような働きかけができると良いと思う。

永田会長 この計画も横断的な計画なので、ぜひ巻き込んで連携してほしい。

南部主査 八広図書館の事例であるが、はなみずき児童館という、指定管理者がやっている児童館があるが、その赤ちゃん向けサービスとして図書館と連携した事業をしてはどうかという話が出ている。放課後についても同じように連携することができればと思っている。

永田会長 指定管理者を指定するときにそういう条件を付けるというのも手である。

倉松館長 おそらく主管部署もそういう観点を持っていなかったのだと思う。すぐできるかは別として、主管部署には情報提供をして、業務として広げていくことができればと思う。第3次計画の目標について、我々の方で考えていることもある。このことについてご議論いただき、目標に選ばれたものについてどうするかというご意見もいただきたいと考えている。

南部主査 中学生の不読率を何とか改善できないかと考えている。国でも不読率の改善を目標にすると聞いているので、そのところがメインになってくると思う。そのことについてもご意見をいただければと思っている。

永田会長 不読率は今わかっているのか。

南部主査 中学生が約15%、小学生が約5%となっている。

河西委員 小学生は不読率が低い。過去半世紀以上、本を読まない子が20%を超えることはない。現在は90%以上の小学生は進んで本を読んでいる。中学生になると、読む本が難しくなってくるので、不読率は上がる。絵本を10冊読むのは簡単だが、中学生以上の読む本は、1冊読むのに1年かかる場合もあるかもしれない。高校生と成人の不読率は共に50%ほどで、ほとんどかわらない。これは大人も同じで、全国民が同じように本を読むかということではなく、本を読む人と読まない人が分かれてくる。

北村委員 蔵書が多い家庭のお子さんは本を読むようになると思う。先ほど所得との関係の話が出たが、親が読んでいるから子どもも読むようになる。先ほど、河西委員が読書と成績向上の相関関係があるとおっしゃったが、これを表すデータはあるか。

河西委員 アメリカでもかなり前からそういう調査はたくさんされている。話題になったのは、OECDのPIISA型学力調査で、読書をたくさんする子は国語の正答率が高いとか読解力が高いなどのデータはある。日本でも、子どもの学力低下が叫ばれてから全国学力調査を行っているが、その分析の中で、学校図書館との関係が報告されている。2008年の調査では、学校が計画的に授業で学校図書館を使っている学校は、児童生徒の成績が高いグループ、低いグループ両方で成績が伸びたということが分かっている。元々成績が高いグループの成績を上げるのは比較的簡単だが、低いグループの成績を上げるのは難しい。学校図書館を計画的に有効活用している学校では全体が上がっている。それから、山形県鶴岡市で、不読者が200人以上いた学校で、学校図書館の改革をしたことで、不読者が一桁台まで下がったという学校もある。同校で10年活動された学校司書の方も、読書は成績の低い子に特に有効だと言っている。思うに、それは図書館での読書指導が、いわば補習的な役割を果たすことで学習の下支えになっているのではないか。去年の学力調査分析では、探究的な学習の効果が示されていた。調べ学習等をやると国語や社会の

成績が伸びる。非常に地道な指導であるが、学力向上につながっている。それがあ
るから、国も最近学校図書館や新聞配備に大きな予算を投じている。不読率の改善
においては、実は一番改善されたのが中学生である。中学生は97年度では50%
を超えていた。それが15%ほどまで改善された。15%というのは、3,40年
前の小学生の不読率とほぼ同率である。子どもたちは小学生のうちが本が好きであ
る。しかし、だんだん読む本が難しくなってきた、読めない本が出てくる。小学生
の不読率5%の中には、おそらく学習障害、つまり、読みたくても読めない子も含
まれていると思う。それを考えると、読める子は、ほとんどの子が読んでいると言
えると思う。

永田会長 最近アメリカの研究所(ピュー)で、アメリカの若者の読書あるいは図書
館に関する調査が出された。その結果によると、中学生くらいの子もたちは割と
本を買う。つまり、親の所得が関係している。また、中学生になると自分の本を持
つようになる。学校の司書たちが頑張って本を紹介して本に親しんでもらえるよう
な子は本を読むようになる。ここの部分が日本に欠けているところだという印象を
もった。

南部主査 忙しい中学生にどうやって図書館に来てもらうかというのが問題である。

永田会長 日本の場合は、縦割りで行政がそれぞれの施設を作ってしまうので、子ど
もが行く施設が分散している。図書館だけでという視野ではなく、連携してやって
いったら良いと思う。外国には学童のようなものはない。結局図書館がすべて面倒
をみている。

金子委員 親が本を読んでいる子どもは本をよく読んでいるというデータを私も見
たことがある。なので、子どもに読書を勧めるためにも、保護者に多く読んでもら
う。それを見た子どもも本を読むようになる。それも1つの方法かと思う。それと、
緑図書館でやっていることだが、幼い子の時間で本を読んだ後、今演じたのは、こ
こにあります、どうぞご覧くださいという進め方である。八広図書館でも、私たち
の出し物についての本がある場合はすべて掲示している。そういうきっかけが大切
だと思う。また、先日、緑図書館で終わった後、熱心なお母さんが、いつも5冊は
借りていく方なのだが、母が読むときは子どももよく聞いている。そこで、字が読
めるようになり、読ませようとするとう逃げってしまうという。どうしたら読書をする
ようになるかということを知り、私のご協力できる範囲でお教えした。児童書架
から一般書架にどのように移行させるかということも、図書館の1つの役割である
と思う。

永田会長 目標はどうなっているか。

南部主査 数値目標であるが、平成26年度までの目標としては3つ、児童書及び絵
本の貸出数、システムの導入、学校図書館の貸出数としている。児童書及び絵本の
貸出数というのは継続していきたいと思っている。学校図書館連携システムの導入

はもうすでに完了している。学校図書館の貸出数だが、これは小学校と中学校で差があるということ、また、学校によって生徒の総数も違うので、各学校ごとにどれだけ借りられているかというような数値にしていくのが良いかと考えている。その他考えられる指標としては、団体貸出の冊数とか区立小・中学校生の不読率だが、どういう形で統計をとっていくかという課題がある。全国では毎年出ているが、墨田区では教育心理調査(i check)という調査を各学校で行っているが、これで確認することができるかもしれない。

西村委員 教育心理調査(i - check)というのは子どもの意識調査である。学力調査については小学校だと4教科、中学校は5教科で行っているが、それと同時に意識調査をやっている。学級への適応状況とか友人に対する満足度などがあるが、その中で読書への質問項目もあり、それがデータとして学校にある。教育研究所が取りまとめてデータを持っているが、学校ごとの統計は示すことができるかと思う。

倉松館長 先ほどの3番は児童1人あたりとしているが、これは小学校と中学校で全然違うので、小中で別に見る必要がある。また、先ほど話に出た不読率であるが、中学校の不読率を15%から10%にするということは可能性としてあると思うが、小学校の方の5%をこれ以上改善するというのは難しいということなので、これを数値目標にすることは難しいと思っている。

河西委員 小学校の不読率は10%以内くらいが妥当なところではないかと思う。

倉松館長 中学生の不読率は15%ほどであるが、これは目標としてどのくらいが妥当であるかご意見をいただきたい。

河西委員 15%というのは良い数字だと思う。

西村委員 墨田区は全国からすると不読率は高いと思う。20%を超えていると思う。

河西委員 だとすると、全国平均を目指すというあたりが妥当だと思う。

小田垣委員 それは東京全体に言えることなのか。大都市だからということと関係があるか。

西村委員 東京都と墨田区を比べてのことである。不読率については、大都市だからというようなことはないと思う。読書活動推進の中で、学校の朝読書が導入され、ゆとり教育の時代はそれを進めてきたが、最近は学力向上に重きを置くようになり、読書の時間を朝学習にしている学校が増えている。今墨田区の中学校で朝読書をやっている学校は2校しかない。時期的に読書週間だけやっているというのが残りの8校である。逆ではないかという話はしている。

北村委員 たとえば、ここに国語の学力向上などを入れてはどうか。

倉松館長 学力向上については教育研究所という部署が学力調査をやりながら取り組んでいる。墨田区では、読む力は上がってきているが、問題文を読んでどこが問題かを考えるところが弱いとされている。問題文も日本語で書かれているわけだから、読解力がないと答えには至らない。なので、そういう認識は持たれているかと

は思うが、読書の時間が減らされているという現状もあるので、図書館としても中学生向けに情報誌を出して啓発してはいるが、どうしたら中学生を取り込むことができるかのアドバイスもいただきたいと考えている。

永田会長 目標としては、1番は残す。2番は達成済み。3番を不読率や1人当たりの数値に直すという考え方があろう。これは図書館だけではなく区全体の目標だと思う。ここの狙いは読書推進計画だが、環境作りとして設定できる目標はあるか。

河西委員 調べ学習の関係でいうと、0門～8門の児童書の回転率は取れないか。

永田会長 一般にミニマムな話になってくると何を意味するかわからなくなってしまう。代替になるかわからないが、学校連携のようなものを充実させるという目標があればと思う。学校自体が活性化するような数値目標が出れば、それを経年で支援するという事も考えられる。

西村委員 調べる学習コンクールの支援ということで私が前にいた学校で新規採用の国語担当教員に、調べる学習に応募するから授業で取り扱うよう指示をしたところ、どうやればいいかわからないというので、図書館に聴いてみるよう指示したら、図書館の職員の方に直々に授業をしていただいたり、様々な協力をしていただき、コンクールに応募することができた。今の学校でも新規採用がいるので、図書館に相談しなさいと指示している。図書館にサポートしてもらえて助かるという声をよく聞く。だから何をどうすればいいかわからない教員にとっても非常に役に立つシステムだと思う。だから、図書館支援員の使い方をもっと強く学校にアピールしてもいいと思う。それ以外にも、図書館でビブリオバトルを主催するという話があったり、ポップコンテストを行ったり、いろいろやっていただいている。ここに啓発とあるが、こういうことを広報していけば良いと思う。区の広報にも図書館からのお知らせがあまりないような気がする。

南部主査 いろいろと学校図書館支援をさせていただいている中で、先生方ともっとコミュニケーションを取ろうということで、学校の先生向けのニュースレターを出させていただいている。そこに調べる学習ではこういうことをやっていますということをややく広報できた。

西村委員 今年の夏休みに、ここで図書館の職員にビブリオバトルを実際にやってもらい、学校の教員が見学をした。そこで勝手がわかり、学校でもスムーズに行うことができると思う。ひきふね図書館が主催するビブリオバトルにも、できるだけ多くの中学生が参加するよう、ただ本を読むだけでなく、それをどのように生かしていくかということを目標に織り込むことができればと思う。

村山委員 私たち大人だったらどのような本が出版されていてというのを新聞の書評欄とかである程度情報を得ることはできるが、子どもはどのようなルートで情報を得るのか。図書館で何かサポートとかはしているか。

南部主査 図書館では、各年代に合わせたブックリストというものを出している。特

に中学生向けでティーンズ情報誌を出しているが、そこでは必ず年4回、本を紹介している。また、ひきふね図書館に来ていただければ本の紹介をしている。

村山委員 図書館に来ればいろいろな情報があると思うが。

南部主査 おすすめの本はあり、小学校を通して全小学生に配付している。中学生向けのティーンズ情報誌も中学校を通して全中学生に配付している。

河西委員 さきほど不読率の調査について述べたが、同じ調査の中で、小中高生が今読んでいる人気の本の上位のタイトルが毎年「学校図書館」という雑誌の11月号に掲載される。このところの傾向では、マスコミに出たものを読むという傾向がある。たとえば映画化されたものとか、自分の好きなタレントが出たドラマとかである。自分の本の好みや見識が形成されていて、本人の意思で本を選ぶことができる子は少なくなっている。大学生でも、書評が新聞に何曜日に掲載されているか知っている学生はほとんどいない。新聞自体を読まない。なので、一昔前の読書好きの人みたいに、自分から本の情報を集めようとする子どもや学生は少ない。小学生の読書傾向はほとんど変わっていない。伝記とか歴史とか、そういうものは上位に来る。

永田会長 別の自治体だが、中学生に来てもらうために、中学生に本を選んでもらって、自分の選んだ本が図書館にあるから行こうというようにしているところもある。そういう中学生コミュニティの意見は重要になる。中学生が読みたいものは中学生に聞いた方が良い。

河西委員 欧米のティーンズコーナーでは、漫画のコーナーがどこでもある。ローマ字で「MANGA」と書いてある。なのに、おひざ元の日本では置いていない。一番ひきつけるコンテンツであるが、それをあえて置いていない。

西村委員 図書の購入リストを作るときは、まず図書委員がリストを上げて、教師が点検して足していくという形を取っている。それで自分たちで探して買っているが、そのように買うと、貸出も多くなる。やっぱり中高生の意見を聞くことも大事である。

戸島委員 新規事業その1の家庭の10分間読書の推進とあるが、これはできるのか。

南部主査 実際にはPRまでしかできない。どのくらいの家庭で読書が行われているかまでは調査できていない。そこが限界かと思っている。そこで、第3次では、継続はすると思うが、目玉にはならないのではないかと思う。

河西委員 2010年が国民読書年だった。そのときに「家読(うちどく)」という言葉が生み出され、「家でみんなでそろって本を読みましょう」ということが言われた。そういうことの影響で入ってきたのかなと思う。よく「子どもが本を読まないが、どうすれば良いか」と聞かれるが、「では親御さんは本を読んでいますか？」と聞くと黙ってしまう。大人が楽しそうに読んでいると、子どもたちも読みたがる。

永田会長 いろいろと意見が出たが、それを踏まえて図書館の方で検討していただき、

また次回の会議でご報告いただきたい。それでは、本日の議事は全て終了した。これで、平成26年度第1回墨田区図書館運営協議会を閉会する。